

明日からの実践へ

「第13回訪問看護・在宅ケア研究交流集会」開催

2007年11月17日(土)・18日(日)、日本教育会館(東京都千代田区)において第13回訪問看護・在宅ケア研究交流集会が開催された。

1日目はデイサービス「このゆびとーまれ」の惣万佳代子氏による特別講演「地域で発揮する看護力」。1993年に看護師3人で始めた「このゆびとーまれ」の歩みの真髓をユーモアを交えて講演された惣万氏は「制度があって活動するのではなく、ニーズがあるからやっていること。国が私たちに何をしてくれるかではなく、私たちは何ができるのかを考えよう」と。

午後のプログラムは「研究発表会」と「シンポジウム・飛翔しよう、在宅ケアの現場で」。シンポジストは大島一博(内閣府政策統轄官付参事官)氏、高橋京子(訪問看護ステーションやすらぎ所長)氏、高瀬義昌(たかせクリニック院長)氏、佐藤昭枝(平塚共済病院看護部長)氏を迎えて、現場で直面している問題がそれぞれの立場から語られた。

2日目の第1分科会は平原優美(あすか山訪問看護ステーション所長)氏、高橋洋子(おもて参道訪問看護ステーション所長)氏を講師として「ターミナルケア事例検討から学ぼう」が行なわれた。事例検討を重ねることで看護観や死生観を共有、そしてチームワークを確認でき、ターミナルケアに対する不安の解消に役立つと、おもて参道訪問看護ステーションでの事例検討を紹介し、訪問看護認定看護師2期生をモデルとしてデモンストレーションを行なった。デモ後に行なわれた質疑応答では「事例検討では質問責めになりがちなので、事例提供者への配慮を」「制限時間内で終わらせるためによりテーマを絞ったほうがいいのかではないか」など、改善策が会場から次々と提案され、その後、会場から参加者を募り、2回目のデモが行なわれた。平原氏は「日々忙しいなかでよりよい実践をするために効率的なカンファレンスとそのフィードバックが必要」と語り、壇上と会場が1つになって分科会を行なえた満足表情だった。

なお、そのほかの各分科会のテーマは「療養通所介護」「働きやすい職場作り」「住まいにおけるリハビリテーション」「ケアマネジメント ひとりの人として認知症をとらえる」であった。第3分科会「働きやすい職場作り」では退職理由として最も大きな割合を占める「職場の雰囲気」に対する関心の高さからか30名の申し込みのところ実際に60名の参加があったとのこと



であった。

続いてランチョンセミナーとして「アメリカの退院支援と在宅ケアの実際」が村上紀美子(医学ジャーナリスト)氏と宇都宮宏子(京都大学医学部附属病院地域ネットワーク医療部地域医療連携室)氏を講師として行なわれた。近未来の日本ともいえるアメリカにおいて退院後に行なわれている在宅ケアの様子、そして現在の日本における退院調整についての発表となった。

午後は訪問看護認定看護師活動報告会として「認定看護師の活用拡大を考える」が角田直枝(日本訪問看護振興財団認定看護師教育課程副課程長)氏を座長として行なわれた。まず来期より訪問看護認定看護師教育課程の開催校として聖路加看護大学看護実践開発研究センターと大分県立看護大学の2か所が増設されることが発表された。その後、所長、あるいはスタッフとして活動する認定看護師、認定看護師をスタッフとして管理する所長による報告が行なわれたが、3者とも地域に対する活動を実践、評価している点が印象的であった。会場の意見も織り交ぜつつ、角田氏が「管理者は管理者なりにキャリアアップ、スペシャリストはスペシャリストなりにキャリアアップ、管理者とスペシャリストはハーモニー」と締め、終了を迎えた。

閉会の挨拶として財団理事の佐藤美穂子氏が「この二日で学んだことをぜひ実践の場で役立ててほしい」「次回も参加しないと損するようなものにしたい」と述べ、終了となった。第14回訪問看護・在宅ケア研究交流集会は2008年11月15日(土)、16日(日)に行なわれる予定。

問い合わせ先 ●財団法人日本訪問看護振興財団
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-8-2 日本看護協会ビル 5階
TEL. 03-5778-7005(事業部) FAX. 03-5778-7009
E-mail : kensyu@jvnf.or.jp